



# いま、リビングウイルを考える

## ～人生の最期を私らしく～

長野県医師会は12月2日(日)松本市内のホテルにて「いま、リビングウイルを考える～人生の最期を私らしく～」と題した公開シンポジウムを開催しました。500人余が聴講。主催者を代表して長野県医師会岡田副会長が挨拶した。後、医師であり作家でもある長尾和宏氏が基調講演。後半はフリーパーソナリティ武田徹氏の司会進行により、ワークショップを開催しました。当日の様様をダイジェストでお届けいたします。



### 「良い人生だった」と 思えるための終の選択

基調講演 長尾和宏氏  
医療法人社団裕和会理事長  
長尾クリニック院長



#### 神戸そして東北の震災 著名人たちの終末期から あらためて死を考える

長尾氏は、今年選歴を迎え、生前葬を執り行ったというエピソードから話切り出しました。生前葬をやること決めた1年前から、一番のプレッシャーは「当日までは絶対に死なない」ということでした。生前葬を本葬にしないように「何とか生きていよう」と思ったと、会場の笑いを誘います。

「明日あとと思つ心の仇帳  
夜半に風の吹かぬものは」  
明日もあると思つてわれわれも桜の花も生きています。夜中に嵐が吹けば散ってしまうのに。親鸞聖人が9歳のときに詠んだこの歌を例に出して、「死」というものを考える大切さを語りかけます。

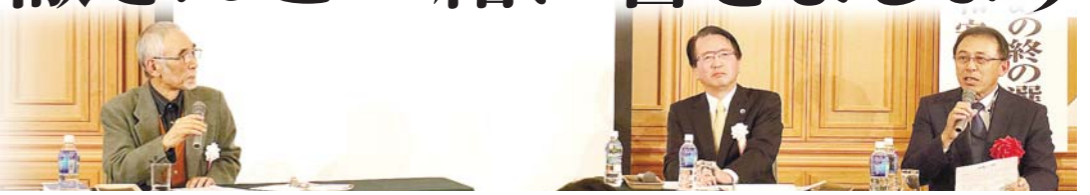
「真ん中に本人の意思  
良い人生とするために  
『最期』を話し合う」  
突然の事故や病気で亡くなる人は全体の5%。ほとんどの人は「終末期」という準備期間を経て死に至ります。その終末期は大きく三つのコースに分かれます。Aコースは「がん」。今日本では3人に1人はがんで亡くなっています。Bコースは「臓器不全症」。肝臓を代表されませんが、患者さんは入退院を繰り返すので、どこからか終末期が見えてくることが特徴です。Cコースは「認知症」。介護施設に入ることが多く、その期間が長い傾向にあります。

「真ん中にあるのが、本人の意思『リビングウイル』。それを家族が同意したものが事前指示書。そして元氣なうちからお医者さんを含めて、何度も話し合うのが人生会議(ACP)です。大事なものは、本人の意思を度々したものでなければいけないということ。本人の思いが生かされなかつたら、良い人生だったとは言えないでしょう」

「リビングウイル」とは、「重病になり自分自身では判断ができなくなる場合に、どのような医学的ないしは法的判断をしてほしいかを説明しておく書類」です。つまり、主に終末期の延命治療に関する自分自身の生前意思表明です。さらに、思考能力がなくなったときに備え、自らの終末期の医療に関する決定の代理人を定めた書類のことを「事前指示書」と呼びます。

## リビングウイル(生前意思表示)を武田徹さんと一緒に書きましょう!

■司会・進行 武田 徹氏  
フリーパーソナリティ  
■書き方指導 杉山 敦氏  
長野県医師会在宅医療推進委員会委員長  
松本市医師会長  
■アドバイザー 長尾 和宏氏



「リビングウイル」とは、「重病になり自分自身では判断ができなくなる場合に、どのような医学的ないしは法的判断をしてほしいかを説明しておく書類」です。つまり、主に終末期の延命治療に関する自分自身の生前意思表明です。さらに、思考能力がなくなったときに備え、自らの終末期の医療に関する決定の代理人を定めた書類のことを「事前指示書」と呼びます。

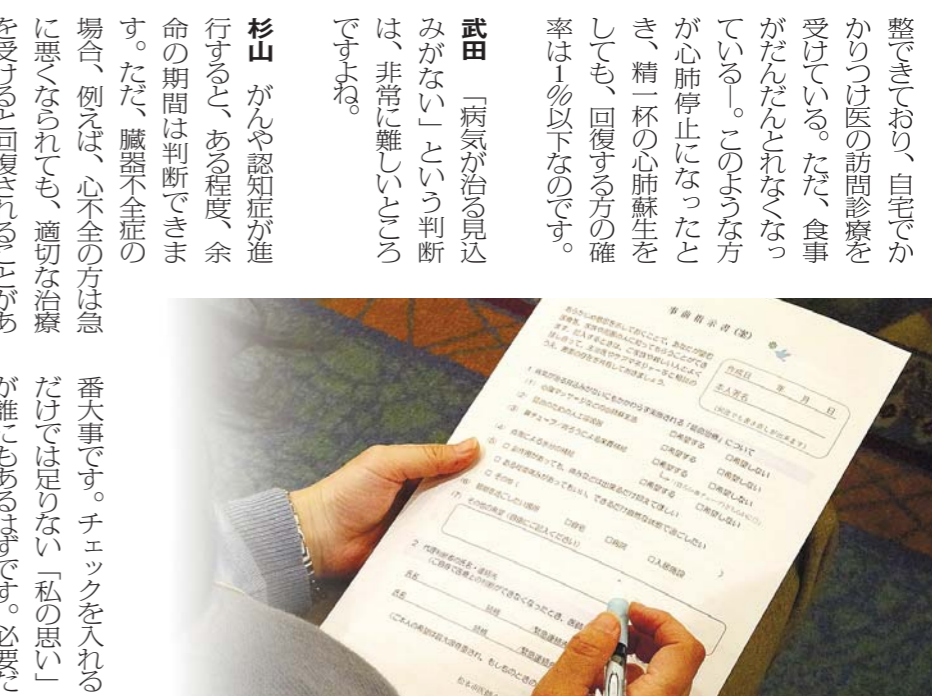


武田 杉山先生、この事前指示書(案)をつくるに当たり、どのような苦労されましたか。

杉山 2年かけて検討してきました。事前指示書づくりに参加している専門職ばかりつけ医や看護師だけではありません。救急病棟の医師や消防局の救急救命士の皆さん、検視検案とも関係します。警察署の刑事課長や弁護士にも入っていただきました。松本市には35地区の地域づくりセンターと12カ所の地域包括支援センターがあり、そういう枠組みごとに、医療介護の専門職、民生委員や健康づくり推進員、市民の皆さんに来ていただいたり、細かく「どうまで手直ししてきました。手順を踏み、話し合いながら作っていくのが一番大事だと思います。本年度中には、「案」の文字をこめて、市民の皆さんにお示ししようかと計画しています。



武田 長尾先生は、講演で、リビングウイルを実際に書いている方が日本ではまだまだ少ないとおっしゃっていました。地域による差というのがあるのでしょうか。



武田 長尾先生は、講演で、リビングウイルを実際に書いている方が日本ではまだまだ少ないとおっしゃっていました。地域による差というのがあるのでしょうか。